

気合、笑い、静座。 困難はこれで乗りこえろ！ アニマル浜口氏

ゲスト●元プロレスラー レスリングコーチ

野獣のような強さを目指して

——浜口さんがプロレスラーを目指されたきっかけを教えてください。

生まれたのは島根県の浜田市。9人兄弟の下から2番目。父親が商売に失敗して、生活はあつという間に困窮しました。おまけに父は酒を飲めばいつも暴れる。そんな中、母は並大抵じゃない苦勞をして僕たち兄弟を育ててくれました。

中学を卒業後、大阪の鉄工所で働いて、それから名古屋、豊橋、東京、横浜と各地の飯場を流れた。でもあるときね、普段すごく穏やかな先輩が、酒に酔って路上で大暴れをしているのを見た。「ああ、オレもこのまま目標もなく生きていたら、いつかあんなふうになってしまう」。そう思って大阪に戻り、同時に、ボディビルを習いはじめました。たまたまそのジムの会長さんが国際プロレスの社長と親交があつて、見込みのある若者はプロレス入りの道が開けたんです。ここで僕ははじめて人生の目標を見つけました。トレーニンングに打ち込んで、昭和44年、22歳のときに国際プロレスに入門しました。

僕はプロレスラーとしては身体が小さいんです。だからそのぶん人の何倍もがむ



道場の壁が格言で埋め尽くされている。これはアニマル浜口氏と道場生が気になる言葉や先人の教えを書き留めたもの。娘の浜口京子選手が対戦相手の反則とジャッジミスで涙をのんだ際も、江戸時代の名僧・沢庵和尚の言葉に救われた

プロフィール 本名・浜口平吾。1947年島根県出身。69年「国際プロレス」に入門。以後、アニマル浜口として「新日本プロレス」「ジャパンプロレス」などで活躍。87年の引退後は「アニマル浜口トレーニンングジム」を設立。91年にプロレスラー、格闘家養成のための「浜口道場」を開設し、多くの人材を送り出している。長女の浜口京子さんのレスリングコーチとして、14年連続世界選手権出場、世界選手権5回優勝、そしてアテネ・北京の両オリンピックでの銅メダル獲得を支える。

プロレスラー「アニマル浜口」として活躍。写真は1983年当時

しゃらに練習してカバーしようと思いました。「浜口、野獣のように強くなれ」と社長に言われて付けてもらったのが、この「アニマル浜口」というリングネーム。

しかし、残念なことに昭和56年に国際プロレスは倒産。その後はラッシュャー木村さん、寺西勇さん、そして僕の3人で「国際軍団」として、当時、アントニオ猪木さんや藤波辰巳さんらのビッグネームが居並ぶ新日本プロレスに活動の場をいただきました。

僕たちは所詮、倒産した団体のレスラー。

認めてもらうためには、これまで以上のパフォーマンスが必要だ。そう思って、僕は毎日、誰よりも早く会場入りしてトレーニンングをしました。盛り上げるためには、技よりも何よりも、まずは身体が動かなくては始まらない。おかげでレスラーとして活躍を続けることができたと思います。



発奮忘食で世界一へ

——引退後開かれたジムにはレスラー志望の若者が集まり、やがてレスリング道場「浜口道場」を開設。そこに愛娘の浜口京子選手も入門します。

京子はもともと水泳でオリンピック出場を目指していたのですが、あるときどうも様子がおかしい。だんだん目の輝きが消えていくのに気づいたんです。

父親としてこれは捨ておけないと、僕は京子を呼んでひざをつきあわせて、理由を聞いた。すると京子は泣きながら「もう水泳を続けていけない」と。京子は水泳の強豪中学に進んだのですが、壁にぶつかり思いつめていたんでしょう。「じゃあ、おまえは将来何になりたいんだ」。長い沈黙の後、京子からは、「プロレスラーになりたい」と。初めて聞く言葉に驚いたけれど、目は真剣そのもの。決意は本物でした。

「よし、わかった。だったらまず汗をかけ」。そう言っ、僕は京子をジムに連れていき



練習後、皆で道場訓を唱和。その後思いっきり笑う「笑いピクス」で締める。最後にアニマル浜口氏が作詞作曲した『宝の山』を合唱。「宝の山が降りてきた〜、ワッハッハ、ワッハッハ〜 あなたも笑えば笑顔千両 福の神ワッハッハ、ワッハッハ〜」



幼いころの京子さん(右)とアニマル浜口氏、長男の剛史さん(左)



1997年、世界選手権で優勝した京子さんを肩車

ました。汗と一緒に沈んだ気持ちを発散させるためです。

その後、僕は京子にボディビルを教え、すぐに無断でコンテストへの出場を申し込ませました。京子も女房も大反対だったけれど、絶対に出場させると言い張り、2カ月間みっちりトレーニングを積ませました。

とにかく、自信をつけさせたい。元通りの明るく快活な京子に戻ってほしい。それが父親としての僕の思い。そして大会当日、京子は史上最年少で奨励賞を受賞しました。「やればできる」。あの経験で、京子は自信をもう一度取り戻せたんだと思います。

——世界チャンピオンへの道のりは、まさに親子の絆からはじまったわけですね。

京子が初めてレスリングの世界選手権で優勝したのは97年。僕たち親子は試合直前までハードな練習を続けていました。道場はいつも夜10時まで。あるとき京子が時計を指差して「お父さん、時間だよ」。僕は「京子、発奮忘食だ」と。ときには食べることも忘れて、練習に没頭しなくては世界など獲れるはずがない。その気持ちは京子に通じ、

一心不乱に世界一の練習を積みました。そしてその年、並み居る強敵を撃破して、とうとう京子はチャンピオンとなったのです。

——娘と二人三脚で闘ってきた父親として、親子の関係についてどのようにお考えですか。

アテネオリンピックの準決勝で、京子は電光掲示板の表示ミスなどがあり金メダルを逃した。ずっと死に物狂いの練習をしてきて、こんなことで夢が終わってしまうとは……僕はスタンドから身を乗り出して、「おい、おかしいじゃないか！ 京子は負けていない。オレは納得しないぞ！」と絶叫した。

親子関係には、理の世界と情の世界があると思う。理を大事にして黙して語らずでも親として通ったかもしれない。しかし、あのとき京子と僕の目が合い、京子は明らかに助けを求めていたんだ。親ならば、たとえ判定が変わらないとわかっていても、叫ばなくちゃいけないときがある。あの叫びは「オレはおまえの味方だ、おまえを愛しているんだ」という父親としての表現方法だったんです。

ここぞというときは、おまえのためなら

死ぬるほどの情があるんだと、親はしっかり子どもに伝えなくちゃダメだ。それは理屈じゃないんだ。

元気の源は気合、笑い、静座

——最後に、読者の皆さんへメッセージをお願いします。

どんな仕事にも必ず困難があります。それを打ち破るには、元気がなくてはならない。僕と京子の場合、元気の源は「気合、笑い、静座」。

はじめは気合だけ唱えていました。しかし、京子は10年間、世界のトップレベルで闘い続け、心身が緊張と疲労で極限状態。アテネ五輪の後、僕はこのままでは京子がもたないと感じた。そんなとき訪れた富士山で、あの霊峰富士がオレに「笑え」と語りかけてきたわけです。「ワッハッハッ、ワッハッハッ」と、リズムよく腹の底から大声で笑うことで緊張を緩めることを学びました。

もう一つ、僕たちが実践しているのが静座。心に迷いが生じたとき、1メートル先の壁にマジックペンで印を付けて、そこをじっと見る。心を落ち着けて、自分の人生をたどり直す。すると頭が整理され、この先どうしたらいいかも不思議とわかってくるのです。

一切の困難は自分を強くするための試練。どんな苦しいときも、そこに喜びを見つければ、感謝の心がわいてくる。自分の運命は変わる、変えられるのである。さあみんな、元気を出して頑張ろうじゃないか！